

第 26 期日本学術会議 薬学委員会 第 2 回基礎系薬学分科会 議事録

日 時 令和 6 年 8 月 2 9 日 (金) 10:00~12:00

場 所 オンライン会議システム (Zoom)

参加者 分科会委員 20 名

(以下、敬称略)

赤羽悟美、新井洋由、石井明子、井上 豪、内山真伸、小川美香子、加藤晃一、神谷真子、北川裕之、佐治英郎、武田真莉子、津本浩平、徳山英利、永次 史、庭山聡美、樋口ゆり子、深見希代子、藤田直也、三澤日出巳、眞鍋史乃

欠席者 一條秀憲、井上純一郎、遠藤玉夫、中島美紀、南 雅文、山崎真巳

議 題

(0) はじめにアジェンダについて説明があった。

(1) 日本学術会議の法人化に向けた動きについて

あまり大きな進展はないものの、8/28 付メールが配信された旨、情報が共有された。

(2) アンケートの結果について

事前配布資料として配信されたアンケート調査の結果について改めて情報が共有され、研究力の低下や薬学系研究の注目度低下、就職活動の長期化、6 年制の総括が必要といった委員からの意見の一部が紹介された。

(3) 第 26 期分科会活動計画について

基礎系薬学分科会として、第 26 期分科会の活動計画についてどのように進めるか、意見交換をおこなった。シンポジウムのテーマや対象についての議論が行われ、薬学に特化せず他の分科会との連携を提案する意見や、日本薬系学会連合が実施するシンポジウムとの差別化が必要との指摘があった。具体的には、アカデミア創薬を盛り上げるための取り組みや、学問と教育システムに分けた戦略的な体制の整備に関する意見が多く、シンポジウムの方向性として、創薬の学際的な研究の重要性を踏まえながら、薬学部の研究力低下や若手人材の減少について考え、学生交流の機会の増加や、新しい試験制度の検討などにも言及し、シンポジウムを通じて提言を行うことが適切との意見が多く集った。シンポジウムでは 6 年制の総括や研究力の低下、若手人材の育成などをテーマにすることが挙げられ、私立と国立の違いや研究力低下の要因も含めた議論が必要との意見で一致した。

以上